

計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評 —価値概念の観念性について—

泉 正 樹

はじめに

- 1 マルクスの商品論について
 - 1.1 「何事も初めが困難」
 - 1.2 冒頭商品論とマルクスの剰余価値
 - 1.3 他学説批判の起点としての冒頭商品論
- 2 ジェームズ・ステュアートの計算貨幣論
 - 2.1 貨幣の観念的度量単位説
 - 2.2 ジェームズ・ステュアートの計算貨幣論について
 - 2.2.1 測定するとはどういうことか？
 - 2.2.2 「標準的な大きさ」
 - 2.2.3 「標準的な大きさ」の恣意性と不変性
 - 2.3 「観念的なモノサシ」
- 3 計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評
 - 3.1 「観念的な価値諸原子」
 - 3.2 計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評
 - 3.3 価値概念の観念性について

結びにかえて

参考文献

はじめに

資本主義経済の意味が改めて問い直される時代状況を背景として、マルクス（Karl Marx）への関心が高まっているようである。19世紀イギリス資本主義の実情を踏まえ、先行学説の検討を通し、資本主義なるものの運動法則を解明せんとしたマルクスの問題意識が、今日、参照基準として改めて再評価されている¹⁾。その意味において、古典が有する底力には感服するよりほかはない。とはいえ、個別の論点に分け入ってみると、マルクスの議論と現代との間には、直ちには埋め難い空白が見出される部分があることもまた確かである。とりわけ、貨幣・金融の領域では新たな手法が開発され、そのことが現代資本主義の宿命として懸念されるだけではなく、そこからの脱却が展望される状況となっている²⁾。

本稿は、現代の解説を問題関心として持ちつつ、マルクス価値論を再検討する準備作業を行なう。商品に内在する価値を基礎に置いて、独創的な市場理解がマルクスによって示されたことはよく知られるところである。しかし、その独創を支えたのは、深い洞察に裏付けられた先行学説の批判的摂取にあった。今日、マルクスの先行学説批判を改めて読み直してみても、依然として首肯せざるをえない部分はもちろんある。その一方で、商品価値の内在性という問題を考える際に、マルクスとは別様の展開をなしうる可能性を封じてしまった側面もあるように思われる。こうした観点から本稿が検討を試みるのは、ジェームズ・ステュアートの計算貨幣論であり、それに対してマルクスが行なった論評の当否である。

当該論点は、『経済学批判』の中で提示されているが、従来、これそのものが検討される機会はありませんように思われる。ここでは、ステュアートの計算貨幣論が的確に把握されるものの、論評のある部分に若干の疑問の余地を残すものとなっている。この点を可能な限り明確に切り出すことに努めて、マルクス価値論を再検討する足場を組むことが本稿の課題である。このため本稿は、準備作業としての性格を有し、その意味で迂遠ではあるが、まずは搦手から論ずることとする。

1 マルクスの商品論について

1.1 「何事も初めが困難」

『資本論』初版の序文においてマルクスは、冒頭商品論に関して次のように述べている。

なにごとく初めが困難だということは、どの科学の場合にも言えることである。それゆえ、第一章、ことに商品の分析を含む節の理解は、最大の困難となるであろう。(Marx [1867] S. 11, 訳21頁)

-
- 1) 基礎経済科学研究所編 [2008]などを参照。また、松尾 [2009]では、現代の経済学が置かれた状況が、「壮大な総合の時代」(305頁)と捉えられ、その中にマルクスの学説を組み入れる試みがなされており興味深い。
- 2) この点、伊藤 [2009]が詳しい。

『資本論』を遡ること8年、1859年に『経済学批判』は刊行されている。マルクスによれば『資本論』は、『経済学批判』の続きをなしているのだという。ただし、その〈続き〉とは、『経済学批判』での内容を受けて、書名に採用されている資本の考察から始まるという意味で〈続き〉をなしているわけではない。『資本論』の冒頭部分に、『経済学批判』の内容が要約してあるとはいわれるものの、それは単なる要約でもなかった。すなわち、『経済学批判』と『資本論』との「関連をつけ完全にするためだけ」の要約なのではなく、前著において圧縮すべき箇所を圧縮するとともに、論じ足らなかった点については、「事情の許すかぎり、さらに進んで展開」することによって「叙述が改善されている」のだという³⁾。

『資本論』第一巻は、版を重ねるごとにマルクス自身によって、そして後にはマルクスの覚書を手がかりとしたエンゲルスによって改訂が行なわれたことはよく知られている。なかでも商品論、とりわけ価値形態論の改訂はよく知られた箇所であろう。マルクスによれば、その改訂は友人（クーゲルマン）の薦めが発端だったのだという（Marx [1867] S. 18, 訳28頁）。すなわち『資本論』初版には、「価値形態」と題された付録が収められているが、第二版以降には、初版本文とは異なった帰結が導かれる付録の論理が採用されたのであった⁴⁾。初版本文と初版付録との叙述形式を見比べてみると、後者には明示的な細分化と階層化が施されており、マルクスがいうように、「教師的な説明」（Marx [1867] S. 18, 訳28頁）への指向が感じられる。その改訂内容の当否如何はひとまず措くとすれば、それは、「なにか新しいことを学ぼうとし、したがってまた自分自身で考えようとする人々」（Marx [1867] S. 12, 訳22頁）に対して向けられた改訂であったといってよいように思われる。自著の導入部分に対するマルクスのこだわりは、第二版後記の以下の文言にも見出せる。

第一章第一節では、それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている。また、第一版ではただ暗示されているだけの、価値実体と社会的必要労働時間による価値量の規定との関連も、明確に述べてある。（Marx [1867] S. 18, 訳28頁）

『経済学批判』の総括を含む『資本論』初版の更なる改訂によって、議論により一層の厳密さと明確化がもたらされたというわけである。読者にとっては難解であろう冒頭商品論を、できるだけ分かりやすく、しかし厳密かつ明確に展開しておこうと心を砕くマルクスが見出せよう。それは、「資本・土地所有・賃労働、国家・外国貿易・世界市場という順序で考察する」（Marx [1859] S. 7, 訳13頁）という当時の研究計画のもと、「第一部 資本について」・「第一編 資本一般」という表題が掲げられつつも、商品と貨幣との分析をもって世に問うた、『経済学批判』

3) Marx [1867] S. 11, 訳21頁を参照。

4) 初版本文の価値形態論では貨幣形態が導かれることはなかったが、初版付録「価値形態」では貨幣形態が導かれている。この点の異同については、奥山 [1990] が詳しい。

に対するマルクスの思い入れの強さの現われといえるのかもしれない。いずれにしても、冒頭商品論に対する少なくとも三度の改訂（『経済学批判』→初版『資本論』→初版『資本論』付録→第二版『資本論』）は、まさに「初めが困難」であるということ、他ならぬマルクス自身が身を以て示したかたちになっているといえるだろう。

1.2 冒頭商品論とマルクスの剰余価値

とはいえマルクスは、「初めが困難」であり、かつ「最大の困難」を伴うであろうと予想はしたものの、その他の部分については、「本書を難解だといって非難することはできないであろう」（Marx [1867] S. 12, 訳23頁）とも考える。つまり、「およそ私についてこようとする読者は」（Marx [1859] S. 7, 訳14頁）、冒頭部分で「最大の困難」に遭遇するかもしれない、しかしそれを乗り越える者にとっては、自分の理論を理解することにそれほどの困難は見当たらないはずだという。

確かに、『経済学批判』を経て『資本論』において詳細に提示された剰余価値論を支えているのは、マルクスが意を致して改訂を重ねた商品論・貨幣論にあるといってよい。わけでも冒頭商品論において、使用価値の捨象を起点として抽出される、諸商品に備わる「共通な社会的実体の結晶」（Marx [1867] S. 52, 訳77頁）として「抽象的人間労働」が提示されておくことは、マルクスの剰余価値論にとって必要な手続きであった。

すなわち、諸商品は互いに異なった使用価値を有しており、そこには何らの共通性も見出せないように思える。しかし、商品の交換価値は、たとえば〈5 kgの小麦 = x kgの鉄〉といったかたちで表わすことができる。ただこの関係は、一見すると奇妙でもあろう。なぜならば、「感覚的に違った諸物は、……本質の同等性なしには、通約可能な量として互いに関係することはできない」（Marx [1867] S. 73, 訳113頁）からである。このため、〈5 kgの小麦 = x kgの鉄〉という等式は、「同じ大きさの一つの共通物が、二つの違った物のうちに、……存在するということ」（Marx [1867] S. 51, 訳75頁）でなければならない。では、その「一つの共通物」とは何か。マルクスによれば、それこそが「抽象的人間労働」であり、それが商品に備わる「価値」として捉えられたのであった。

では、商品形態を取る事物には「本質の同等性」が備わっていると考えざるをえず、それが「抽象的人間労働」に還元されるとするならば、諸商品の価値量は何によって規定されるものなのか。この点についてもマルクスは明解な回答を示している。すなわち、商品の価値量は、「現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間」（Marx [1867] S. 53, 訳78-9頁）によって規定される。つまり、〈5 kgの小麦 = x kgの鉄〉という関係がなぜ成立するのかといえば、それは、双方に「共通な社会的実体の結晶」としての「抽象的人間労働」が対象化されているからであり、その量を規定する、双方の生産に費やされる「社会的に必要な労働時間」（Marx [1867] S. 53, 訳78頁）が等しいからにほかならない。

このように商品価値と抽象的人間労働とが連結されておこなうならば、大枠としてのマルクスの剰余価値論には、あともう一步で到達できる。そして最後の一步は、特殊な商品としての労働力が担う。すなわち、冒頭商品論において主たる分析対象とされたのは、労働生産物商品であったのだから、それは売り出される前に、自身のうちに人間労働を堆積させざるをえない。資本は生産諸要素を商品として買ってきて、それらを使用して当該商品を産出する。そして生産要素のうち生産手段部分には、これも労働生産物として、一定量の抽象的人間労働が対象化されている。商品生産においてこの部分は、もう一方の生産要素である労働力によって、その価値を新生産物に移転される。

この限りでは、新生産物の価値量が、投入時の価値量を上回ることはない。投入時の生産手段の価値は、新生産物に移転されるだけだからである。そこでマルクスは、もう一方の生産要素として買ってこられる、労働力の特殊な性格に注目する。すなわち、資本主義的な市場から労働力が商品として買ってこられる以上、「他のすべての商品と同じに、この商品もある価値をもっている」(Marx [1867] S. 184, 訳299頁) はずである。そしてそれが他商品と同様に、「再生産に必要な労働時間によって規定されている」(Marx [1867] S. 184, 訳299頁) のだとすれば、「労働力の価値は、労働力の所持者の維持のために必要な生活手段の価値」(Marx [1867] S. 185, 訳300頁) とみなせることになる。つまり、資本は労働力の売り手に対して、労働力を再形成するに足るだけの対価を支払えばよい。それは、当該商品の価値量に見合う貨幣との交換がなされるという意味で、正当な商品取引でもある。

こうして資本が買った労働力は、生産過程で使用されて商品生産を遂行する。ただし、「労働力の毎日の維持費と労働力の毎日の支出とは、二つのまったく違う量である」(Marx [1867] S. 207-8, 訳338頁) 点には注意が払われねばならない。すなわち、たとえば一日あたり5時間分の抽象的人間労働が対象化された生活物資を使用することによって、たとえば一日あたり10時間の労働が行なわれうるということであり、このとき両者の間に生じる差(この場合は $10 - 5 = 5$ 時間)を、資本は剰余価値として取得する。こうしてマルクスの資本は、生産の領域で生じる不払労働を根拠として、自商品を価値どおりに販売したとしても価値増殖を行えることになる。

1.3 他学説批判の起点としての冒頭商品論

このようにマルクスの剰余価値論の大枠は、冒頭商品論で与えられる価値規定を土台とし、労働力商品の特殊な性格を柱として組み立てられていると捉えることができる。もちろん、前項でのまとめ方をもって、十全なるマルクス剰余価値論の把握がなせたというつもりはない。特に「抽象的人間労働」の理解の仕方に関しては、別途、慎重な検討を要するものと思われる⁵⁾。しかし、このように捉えることによって、他学説に批判的に対峙したマルクス、という構図を浮き彫りに

5) マルクスが提示する「抽象的人間労働」の把握は、大きく二つの観点から行なわれている。この点は、有江大介によって次のようにまとめられている。

「論争点は、「価値実体」としての「抽象的人間的労働」の抽象性を、かの“生理学的規定”と

できることも確かである。

たとえば、『資本論』第一巻第二編第四章「貨幣の資本への転化」では、等労働量交換を想定すると、 $G-W-G'$ ($G+\Delta G$) を実現できないという点が強調され、「その純粋な姿では、商品交換は等価物どうしの交換であり、したがって、価値をふやす手段ではない」(Marx [1867] S. 173, 訳278頁) ことが指摘される。それは、価値増殖の領域を、流通ではなく生産に求める自説へと導く一行程であったとひとまずは捉えられる。しかしそこには同時に、「商品流通を剰余価値の源泉として説明しようとする試み」(Marx [1867] S. 173, 訳278頁) に対しての批判も含意されている⁶⁾。

また、「貨幣の謎」(Marx [1867] S. 62, 訳94頁) を解き明かすものとして位置付けられた価値形態論では、商品生産社会は必然的・内生的に価格形態を成立せしめ、商品世界は、一方の極の一般商品と、他方の極の貨幣商品とへ分極化されずにはおかないことが論じられる。そこでも、マルクス独自の観点が提示されると同時に、「すべての商品に同時に直接的交換可能性の極印を押すことができるかのように妄想すること」(Marx [1867] S.82, 訳129頁) への批判が意図されているとあってよい⁷⁾。

2 ジェームズ・ステュアートの計算貨幣論

2.1 貨幣の観念的度量単位説

他学説への批判的対峙という観点から冒頭商品論を捉えてみると、そこには、上に挙げたものだけには留まらない論点が提示されていることに気づく。『資本論』第一編第三章「貨幣または商品流通」は、貨幣の価値尺度に関する考察から始まるが、そこでは次のように論じられているからである。

「いう人間労働の無差別なエネルギー支出に見るのか、「社会的実体」としての規定における「価値」の社会的関係規定性に見るのか、という論点に帰着させることができる。」(有江 [1980] 35頁)

また向井公敏は、マルクスに見出されるこのような二つの「抽象的人間労働」の規定が、マルクス価値論に並存する二つの「パラダイム」に根ざすものとされ、次のように論じられる。

「これまでの見解を大別すれば、一方で抽象的人間労働は商品交換に先行する直接的生産過程での人間労働力の生理学的支出(いわゆる体化労働)にほかならず、まさにそれゆえにあらゆる社会に共通する歴史貫通的カテゴリーであると主張する超歴史説もしくは体化労働説と、他方これを商品交換においてはじめて成立する概念(関係概念)として捉え返し、その意味で商品生産に固有の歴史的カテゴリーとする歴史説もしくは社会関係説とに分かれるといえるが、この問題をめぐる最近の内外の論争整理のなかでもあきらかにされているように、今日では、このような抽象的人間労働の解釈上の相違の背後には、いかなれば価値概念の実体主義的把握と関係主義的把握との対立が、さらにいえばマルクス価値論に固有の問題をめぐる体化労働パラダイムと社会関係パラダイムとの対立が存在しているといつてよい」(向井 [1990] 50-1頁)。

このように問題が捉えられることによって、マルクス価値論の精髓は、「リカード価値論の問題構制を単に継承しているにすぎない」(向井 [1992] 95頁) とされる「体化労働パラダイム」ではなく、「社会関係パラダイム」にこそ見出されるとされている。

6) 『資本論』の当該部分に限って言えば、コンディヤック (Étienne-Bonnot de Condillac)、ニューマン (Samuel Philips Newman) といった論者が批判の対象として取り上げられている。

7) 『資本論』ではブルードン (Pierre-Joseph Proudhon) の名前が挙げられ、『経済学批判』ではグレー (John Gray) の議論が取り上げられている (Marx [1859] S. 66-9, 訳104-9頁)。

商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同様に、商品の、手につかめる実在的な物体形態からは区別された、したがって単に観念的な、または想像された形態である。鉄やリンネルや小麦などの価値は、目に見えないとはいえ、これらの物そのもののうちに存在する。この価値は、これらの物の金との同等性によって、いわばこれらの物の頭のなかにあるだけの金との関係によって、想像される。……商品価値の金による表現は観念的なものだから、この機能のためにも、ただ想像されただけの、すなわち観念的な、金を用いることができる。(Marx [1867] S. 110-1, 訳173頁)

ここで論じられていることは大きくいえば二つあると見てよいだろう。すなわち一つは、価格形態の観念性という論点であり、もう一つは、商品価値の内在性という論点である。

まず価格形態の観念性という論点についてマルクスは、諸商品の「実在的な物的形態」と対比して、価格形態は「単に観念的な、または想像された形態である」と論じている。それはまた、「商品価値の金による表現は観念的なもの」であるとも論じられている。つまり、商品に価格を付ける際には、「現実の金は一片も必要としない」(Marx [1867] S. 111, 訳173頁)という意味において、価格形態は観念的とされるわけである。確かに、「10kgの米は1gの金に値する」という価格付けは、頭の中で済ますことができる。

ただし、価格形態は観念的だとしても、商品価値は「目に見えないとはいえ、これらの物そのもののうちに存在する」のだともいう。マルクスにとっての商品価値とは、抽象的人間労働がその実体をなすものとされていた。そしてそれは、「ある与えられた社会のそれぞれの平均的個人がなす平均労働、人間の筋肉、神経、脳等々のある一定の生産的支出のうちに実在している」(Marx [1859] S.18訳29頁。文中の傍点強調は原文による)と論じられる一面がある。このため、たとえ「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえない」(Marx [1867] S. 62, 訳93頁)としても、商品形態を取る事物には、抽象的人間労働が対象化された「価値」が内在する組み立てになる。マルクスにとって商品の価値形態とは、不可視な商品価値の内在性を可視化する機制であったことが想起されよう。上記引用文の後にマルクスは次のように述べる。

それゆえ、その価値尺度機能においては、貨幣は、ただ想像されただけの、すなわち観念的な、貨幣として役だつのである。この事情は、まったくばかげた理論が現われるきっかけになった。価値尺度機能のためには、ただ想像されただけの貨幣が役だつとはいえ、価格はまったく実在の貨幣材料によって定まるのである。(Marx [1867] S. 111, 訳173-4頁)

ここではまず、価格付けを行なう際に、「ただ想像されただけの貨幣」でことが足りるという点、つまり価格形態の観念性が再確認されている。ただそのことが、「まったくばかげた理論が現われるきっかけになった」とされ、「価格はまったく実在の貨幣材料によって定まるのである」と

いう自説が対置されている。以後検討してみたい問題は、ここで「ばかげた理論」といわれる議論が、どのような意味で「ばかげた」ものだったのかということである。マルクスはこの部分に註を付けて、『経済学批判』第二章「B 貨幣の度量単位にかんする諸理論」の参照を促しているが、そこでは以下のように論じられている。

諸商品は価格としてはただ観念的に金に、したがって金はただ観念的に貨幣に転化されるという事情は、貨幣の観念的度量単位説 *Lehre von der idealen Maßeinheit des Geldes* を生む動機となった。価格規定にあつては、ただ表象された金か銀かが機能するだけであり、金と銀はただ計算貨幣として機能するだけだから、ポンド、シリング、ペンス、ターレ、フラン等々の名称は、金または銀の重量部分、または何らかのしかたで対象化された労働を表現するものではなく、むしろ観念的な価値諸原子 *ideale Wertatome* を表現するものである、と主張された。(Marx [1859] S. 59-60, 訳93-4頁。文中の傍点強調は原文による)

ここから見ると、マルクスから「ばかげた理論」と位置付けられているのは、「貨幣の観念的度量単位説」である。この学説をマルクスは、「ポンド、……、フラン」といった価格単位を、金属重量でも労働でもなく、「観念的な価値諸原子を表現するものである」とまとめている。すなわち、商品の価格付けはそれに見合う貨幣量を想像するだけでよい。このことが、「観念的な価値諸原子を表現する」という「ばかげた」考え方を生じさせるきっかけになってしまった、とマルクスはいうのである。

マルクスによれば、「貨幣の観念的度量単位説」は、ステュアート (James Steuart) の議論の中で「完全に展開されている」(Marx [1859] S. 62, 訳98頁) のだという。このため、少なくとも『経済学批判』に抄録された、『経済の原理』の当該部分 (つまり第3編第1部第1章「計算貨幣について」) において、どのような問題が考察されているかという点をまず見ておかねばならない。

2.2 ジェームズ・ステュアートの計算貨幣論について

2.2.1 測定するとはどういうことか？

ステュアートによれば、貨幣 (money) と铸貨 (coin) とは異なる概念であつて、これら二つは区別されなければならない。つまり、「铸貨としての貨幣 money-coin」(Steuart [1767] p. 214, 訳5頁) とは区別されるもう一つの貨幣概念があるのであつて、それをステュアートは「計算貨幣 money of account」ないし「観念的貨幣 ideal money」(Steuart [1767] p. 217, 訳8頁) と呼び、以下のように説明する。

私が計算のための貨幣と呼ぶものは、販売品のそれぞれの価値を測定するために発明された、同等の部分からなる任意のモノサシにほかならない。それゆえ計算貨幣は、铸貨として

の貨幣とは全く別のものであり、すべての商品にたいして適切で比例的な等価物となりうる、何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる。(Steuart [1767] p. 214, 訳5頁。文中の傍点強調は原文による)

ここで論じられていることの大枠は、「計算貨幣」とは「同等の部分からなる任意のモノサシ arbitrary scale にほかならない」ということにひとまずなるだろう。それは、諸商品の「それぞれの価値を測定するために発明された」とも論じられており、諸物の〈長さ〉がたとえば巻尺で測定されるように、諸商品の価値は、「計算貨幣」によって測定されるというわけである。そして後半部分では、「それゆえ」と接続されて、「計算貨幣」と「鑄貨としての貨幣」とは別物であるとされる。「計算貨幣」は、物品としての実在性から切り離されても存在しうる概念だといっているのである。

この部分でステュアートは、自らの「計算貨幣」概念をともかく定義付けたかたちになっている。しかし、そのいわんとすることを掴み取るのはかなり難しい。というのも、ステュアート自身が指摘するように⁸⁾、たとえば〈長さ〉を測定する場合、測定するたび毎に目盛が変動してしまう「モノサシ」を用いるとしたら、その測定はほとんど意味をなさない⁹⁾。意味ある測定をしようとするならば、まずは測定の基準となる長さを定める必要がある。事物の長さは、この基準に基づいて測定される時に意味をもつ。たとえば、〈n期における乙のつま先から踵までの長さ〉を基準にして、諸物の長さを測るということである。

ただ、こうした意味での測定を行なう場合、「モノサシ」が、「何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる」とするわけにはいかなないようにも思われる。なぜなら、〈n期における乙のつま先から踵〉という「実体 substance」がそもそもなければ、〈長さ〉の基準は設定できないだろうからである。

こうした疑問は提示しうるものの、ひとまず上の引用文でいわれていることをまとめるとすれば、次のようになると思われる。すなわち、諸商品の価値を測定する際に基準となる、ある一定の〈価値〉のことを、ステュアートは「計算貨幣」と呼んだのだ、と。

2.2.2 「標準的な大きさ」

検討されるべきは、このような「モノサシ」としての「計算貨幣」が、「何らかの実体というべきものがこの世になかったとしても存在しうる」という点にある。引き続き、〈角度〉や〈長さ〉の測定と類比しながら説明される、ステュアートが考える〈価値〉の測定を見ていくことと

8) Steuart [1767] pp. 223-4, 訳13-4頁を参照。

9) 「私は長さのわからない棒とか紐とかによって、諸物の長さの割合を図ることはできるけれども、誰もこれを測定とは呼ばない。なぜなら、フィートやヤードやトワズで測っていたなら容易に比較できたかもしれないが、測られた諸物を、同じ棒や紐で測定しなかった他の諸物と比較することはできないからである。その結果、こうした場合における測定の意味は、ほぼ完全に失われてしまうのである」(Steuart [1767] p. 225, 訳16頁)。

する。

……計算貨幣は——ここではそれを貨幣と呼ぼう——度、分、秒などが角度に対して、また縮尺が地図あるいは各種の図面に対してはたすのと同じ役割を、諸物の価値に対してはたす。

およそそのような考案物にあっては、単位として常にある名称が採用される。

角度では、それは度であり、地理上の距離ではマイルやリーグ、図面ではフィート、ヤードあるいはトワズ、貨幣ではポンド、リーヴル、グルデンなどである。(Steuart [1767] p. 214, 訳5頁)

〈価値〉を測定する「計算貨幣」は、〈角度〉や〈長さ〉を測定する「考案物」と同じ役割を果たすのだという。そうした「考案物」には、「単位として常にある名称が採用される」のだともいわれる。引用の後半部分では、それらの具体的な単位名が挙げられて、次のように続けられる。

度は特定の長さをもたないが、同様に図面の単位を示す縮尺という要素も特定の長さをもたない。上述のすべての考案物の有用性は、ただ比率を示すことに限られているからである。

これとちょうど同じように、貨幣単位は、価値のどのような部分とも不変で一定の比率をもちえない。すなわち、それは金、銀あるいは他のいかなる商品の特定の量にも永続的に固定させることができない。(Steuart [1767] p. 214, 訳5頁)

ここでは、「度 the degree」や「図面の単位を示す縮尺 the scale upon plans which marks the unit」には「特定の長さ」はなく、「ただ比率を示すこと」がその「有用性 usefulness」なのだとされている。つまり、〈1度 a degree〉や〈2度 two degrees〉ではなく、「度なるもの the degree」という単位に特定の大きさはないとされ、後半部分では、「これとちょうど同じように」というかたちで、「貨幣単位 the unit in money」への言及に繋がられている。すなわち、「価値のどのような部分とも不変で一定の比率をもちえない」と論じられることによって、「貨幣単位」そのものは、ただ諸商品の〈価値〉の比率を示すことがその「有用性」であること、たとえば「ポンドなるもの the pound」という単位を用いて諸商品の〈価値〉の比率が示される旨が論じられていると考えられる。

その後、「すなわち」と言葉が続けられ、「それは金、銀あるいは他のいかなる商品の特定の量にも永続的に固定させることができない」といわれるのだが、この部分はどのように考えればよいだろうか。確かに、事物の諸属性は、それらを測定する「単位」を用いて示されることで、〈角度〉がいくらなのか、〈長さ〉がどれだけなのかといったことが明らかになるものと思われる。しかしその際、「単位」に対して一定の基準が設けられていなければ、「比率を示す」という測定の規律は遵守されえないであろう。ステュアートにおける「モノサシ」の意義も、ここに見出されていたように思われる。この点について、ステュアートは以下のように論じている。

貨幣というものは、厳密かつ哲学的にいえば、すでに述べたように、同等の部分からなる観念的なモノサシ ideal scale である。もし、その1つの部分の標準価値とは何であるべきかと問われるとすれば、私は、1度、1分、1秒、の標準的な大きさとは何であるのか、という別の質問を投げかけることで解答とする。(Steuart [1767] p. 217, 訳8頁)

ここでは、単なる「モノサシ scale」ではなく、「観念的なモノサシ ideal scale」というかたちで、「計算貨幣」が「厳密かつ哲学的に」規定されている。その含意については、後に改めて考察してみる必要がある。ここではまず、「モノサシ」というものが、ステュアートにおいてどのように捉えられているのかという点を見ておきたい。

そうするとこの引用からは、「モノサシ」には「標準的な大きさ」があるという通念に対しての、ステュアートの懐疑が引き出せるように思える。「モノサシ」である「計算貨幣」の「標準的な大きさ」とは何なのかと問うてくる者に対して、ステュアートは「別の質問」として、当の質問者に「1度、1分、1秒、の標準的な大きさ the standard length of a degree, a minute, a second とは何であるのか」を問い返したいのだという。

もちろん、ステュアートからこの問い返しを受けたとしたら、おそらくは〈円周の1/360が1度〉、〈1度の1/60が1分〉、〈1度の1/3600が1秒〉と回答することになるだろう。つまり、「1度」や「1分」や「1秒」の「標準的な大きさ」を示すことはできるはずである。

2.2.3 「標準的な大きさ」の恣意性と不変性

ステュアートにおいても、この回答そのものを誤りとするとは思われない。しかし、ひとまず相手からこの回答を引き出した上で、その「標準的な大きさ」なるものの恣意性を指摘すること。これが、上記引用文で述べられている問い返しの真意であると思われる。ステュアートは続けて次のように論じるからである。

それらには標準的な大きさというものがなかったのであって、しかも人間がしきたりによってそれに与えるのが適当と考えるもの以外には、何も必要がないのである。しかし、1つの部分が決定されるや、モノサシの性質によって、残るすべての部分は比例関係に従わざるをえない。(Steuart [1767] p. 217, 訳8頁)

つまり、「モノサシ」に「標準的な大きさ」がないということの意味は、たとえば「1度」が超越的に円周の1/360であるというわけではないということ。それは、「人間がしきたりによって」そのように決めたものであることが、ここでは論じられている。先の例に引き付けて考えてみれば、〈n期における乙のつま先から踵〉が、超越的に〈長さ〉の「標準的な大きさ」になるというわけではなく、たとえば〈n+1期の甲の身長〉を、〈長さ〉の「標準的な大きさ」にすることもできるはずであるということが、ここでは論じられているといえるだろう。

とはいえ「しかし」、ひとたび円周の1/360を〔1度〕とし、〈n期における乙のつま先から踵までの長さ〉をたとえば〔1フィート〕とした場合には、「モノサシの性質によって」、その後はこの「標準的な大きさ」に基づいて分割なり合成なりが行なわれざるをえないことも指摘されている。こうした見解が「計算貨幣」にも適用されて、ステュアートは次のように論じる。

第1歩は全く恣意的であり、人々は、その1つないしそれ以上の部分を、貴金属の正確な量に合わせることで足るであろう。そうして、これがおこなわれ、その貨幣が、金および銀にいわば実現されるや否や、貨幣は新しい定義を獲得する。すなわち、そのとき貨幣は価値尺度とともに代金となるのである。

なんびとも容易に了解するに違いないが、両金属をこのように価値のモノサシに適合させるからといって、両金属それ自体が、それゆえモノサシとなるべきだということにはならない。(Steuart [1767] p. 217, 訳8頁)

ここでは、「計算貨幣」が「貴金属の正確な量に合わせ」られる、つまり、たとえば〈1gの金の〈価値〉 = 1ポンド〉という「標準的な大きさ」として規定されると、「貨幣」は「価値尺度 the measure of value とともに代金 the price」という「新しい定義を獲得する」のだという。ここまで見てきたところに鑑みて、「計算貨幣」は諸商品の価値を測定する「モノサシ」として論じられてきたのだから、ここでいわれている「新しい定義」というのは、「価値尺度」のことではなく「代金」を指す。ただし、ステュアートにおいて「代金」は「複雑な概念」(Steuart [1767] p. 65 (vol. 3), 訳164頁)とされ、様々な規定が与えられている¹⁰⁾。このため、それがどのような意味で用いられているのかを確定することは難しい。しかしこの部分では、「譲渡可能なあらゆるものの一般的かつ普遍的な等価物」(Steuart [1767] p. 65 (vol. 3), 訳165頁)というほどの意味として解することはできよう。つまり、〈1gの金の〈価値〉 = 1ポンド〉という規定が与えられると、金が「貨幣」として、「価値尺度」であるとともに「一般的かつ普遍的な等価物」になるという文意として解釈できることになる。

とはいえ、引用の後半部分では、こうした理解に対して若干の注意が促されてもいる。すなわち、金の価値なり銀の価値なりを「計算貨幣」である〔ポンド〕と結び付けるからといって、そのことから金なり銀なりが、それ自体で「モノサシとなるべきだということにはならない」のだと。言い換えれば、金なり銀なりは、諸商品の〈価値〉を測定する「モノサシ」としての適性を欠くということが、ここでは含意されたかたちになっているのである。

2.3 「観念的なモノサシ」

一体なぜ、ステュアートは金なり銀なりが諸商品の〈価値〉を測定する「モノサシ」として適当ではないと考えたのだろうか。この問題に対するステュアートの見解を知ることができれば、

10) Steuart [1767] p. 65 (vol. 3), 訳164-5頁を参照。

鑄貨と、それとは区別される「計算貨幣」なる概念がなぜ提示されたのかという問題も自ずと解けるはずである。

金銀複本位制の時代に生きたステュアートにおいてこの問題は、単本位への抽象がなされた上で考察されているのではなく、現実に存在する複本位制が念頭に置かれて、いわば実直に分析されている。また、鑄貨の摩滅といった問題にも目配せがなされているため、なぜ金なり銀なりが、諸商品の〈価値〉を測定する「モノサシ」としての適性を欠くのかという問題に対する回答は、少なからず複雑化された感を否めない¹¹⁾。しかし以下のステュアートの言説には、この問題への核心を衝く回答が示されているものと思われる。

それ(金なり銀なりが〈価値〉を測定する「モノサシ」としての適性を欠く理由——引用者)は、鑄貨の造られている物体が商品であり、人間の欲求、競争、および気まぐれによって、その商品の価値が他の諸商品に対して騰落する、ということである。(Steuart [1767] p. 226, 訳17頁)

鑄貨に加工される金なり銀なりは商品であり、その「価値が他の諸商品に対して騰落する」がゆえに、〈価値〉を測定する「モノサシ」としては不適切だというのである。たとえば長さを測定する場合、巻尺も〈長さ〉を有しており、基準となる長さでもって事物の長さは測定される。しかし、その基準の〈長さ〉が固定されていなければ、測定としては意味をなさなかった。すなわち、基準となる〈長さ〉は超越的に「標準的な大きさ」を有するのではなく、人間の恣意的な取り決めによって設定されるものだとしても、そうした決定を行なうことによって、人は安心して〈長さ〉を測定できることとなり、そこに「モノサシ」の意義が存するのであった。

これと同じように、諸商品の価値を測定する場合にも、基準となる価値が用いられるのだとすれば、その基準は、いったん取り決められた後には大きさを維持する必要がある。しかし、たとえば1 gの金の価値を基準の〈価値〉に取り決めたとしても、当の金価値が変動してしまうとしたら、諸商品の価値を測定する際の基準の〈価値〉が変動してしまうことになってしまう。したがって金は、諸商品の価値を測定する「モノサシ」としては不適切と考えられることになる。つまり「計算貨幣」は、「金、銀あるいは他のいかなる商品の特定の量にも永続的に固定させることができない」ということになるわけである。

このことは、「計算貨幣」が単なる「モノサシ scale」ではなく、「観念的なモノサシ ideal scale」として規定されていることに関係してくる。たとえば角度を測定する場合、基準となる〈角度〉が、超越的に円周の1/360の〈角度〉を有するかどうかという点については疑問を挟む余地があるとしても、そうした「しきたり」の中に身を置く人間からしてみれば、〔1度〕がどれほどの大きさなのかは提示できるだろう。また、〈n期における乙のつま先から踵までの長さ〉を

11) Steuart [1767] pp. 222-8, 訳13-8頁を参照。

〔1フィート〕とする「しきたり」の中に身を置く人間も、長さを測定する基準を提示することはできるだろう。つまりこれらの「モノサシ」は、いわば〈実在的なモノサシ real scale〉と考えられるのである。

一方、諸商品の価値を測定する基準の〈価値〉、たとえば〔1ポンド〕を提示しようとする場合にはどうか。これまで見てきたところからすれば、たとえ1gの金の価値を基準の〈価値〉にするという「しきたり」を設けるとしても、「モノサシ」の一目盛分に相当する1gの金の価値は変動しうるのであった。このため、それを基準にして諸商品の価値を測定しようとするれば、刻まれた目盛が測定のために伸縮してしまう「モノサシ」を用いた長さの測定と変わらないことになってしまう。このように捉えられるため、「計算貨幣」は「いかなる物体にも固着させることができない」(Steuart [1767] p. 219, 訳10頁)、つまり〈実在するモノサシ〉としては提示できないことになる。

しかしながら、現実には諸商品の価値は、〔ポンド〕を用いて測定されてもいる。とすれば、測定の特性に鑑みて、たとえ〈実在するモノサシ〉としては基準となる〔1ポンド〕を提示できないとしても、「標準的な大きさ」はあるはずだという推論にそれほど無理があるとは思われない。そしてそうであるならば、「計算貨幣」とは諸商品の〈価値〉を測定する「モノサシ」ではあるが、単なる「モノサシ」ではなくて、「観念的なモノサシ」として提示されることになってこよう。ステュアートの「計算貨幣」は、事物の属性を測定するとはどういうことかという問題を、ある意味において厳格に突き詰めることを通して導き出された概念であったと思われるのである。

3 計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評

3.1 「観念的な価値諸原子」

マルクスによって「貨幣の観念的度量単位説」の完全なる展開として位置付けられたステュアートの計算貨幣論を、本稿では以上のように捉えるが、まとめてみれば次のようになる。

すなわち、たとえば長さが基準の長さに基づいて測定されるように、価値も、基準の価値に基づいて測定される。しかしその基準となる価値を、商品に固定することはできない。なぜならば、商品の価値は変動してしまうから。このため、価値を測定する際に基準となる価値を、〈実在するモノサシ〉として提示することはできない。ただし、価値を基準に基づく測定という観点で突き詰めてみると、基準の価値は「観念的なモノサシ」として捉えざるをえないことになる。これをステュアートは「計算貨幣」と呼んだのだ、と。

マルクスが、「貨幣の観念的度量単位説」を「ばかげた理論」と捉えていたことは先に見た。しかし、商品価値を測定する基準の価値は実在的には提示できないが、しかし存在するはずだという推論は筆者には成立しうるように思われる。一体マルクスにとって、ステュアートの議論のどの部分が納得できないものだったのだろうか。そこで繰り返しになるがもう一度、「貨幣の観念的度量単位説」としてマルクスがまとめた部分を抜き出しておきたい。そこでは次のように述

べられていた。

……、ポンド、シリング、ペンス、ターレル、フラン等々の名称は、金または銀の重量部分、または何らかのしかたで対象化された労働を表現するものではなく、むしろ観念的な価値諸原子を表現するものである、と主張された。(Marx [1859] S. 60, 訳93-4頁)

ここでは「貨幣の観念的度量単位説」が、貨幣単位をして「観念的な価値諸原子を表現するものである」と捉える学説と押さえられている。確かに、ステュアートにおいて貨幣単位は、「金または銀の重量部分」を「表現する」ものとしては捉えられていないようであった。むしろ貨幣単位は、金銀の価値が変動してしまうから「金または銀の重量部分」に固定しようとしても固定できないのであった。また、ステュアートにおいては、たとえば「諸物の価値は、多くの事情に依存する」(Steuart [1767] p.215, 訳6頁)と捉えられており、貨幣単位が「何らかのしかたで対象化された労働を表現するもの」に還元されていたわけでもない¹²⁾。このため、マルクスによってまとめられた「貨幣の観念的度量単位説」とステュアートの計算貨幣論は、この限りでは符合する。残される問題は、ステュアートにおいて、貨幣単位が果たして「観念的な価値諸原子を表現する bezeichnen もの」として捉えられているかどうかになる。

そこで改めて考えてみると、「観念的貨幣 ideal money」とも称される「計算貨幣」とは、要するに〈観念的価値 ideal value〉そのものを意味する概念に他ならないことに気づく。なぜならば、諸商品の価値を測定する基準の価値が、「観念的なモノサシ」つまり「計算貨幣」としてしか想定しえないという議論は詰まるところ、「計算貨幣」とは〈観念的価値〉そのものに他ならないということが含意されるだろうからである。そしてそうであるならば、〈観念的価値〉で測定される諸商品の〈価値〉もまた、〈観念的価値〉ということになりそうである。このように考えてみると、ステュアートの貨幣単位は、「観念的な価値諸原子を表現するもの」として捉えられていたといえる。マルクスにおいて、ステュアートの議論は的確に把握されているわけである。

しかしながらマルクスの主眼は、「貨幣の観念的度量単位説」をただ的確に把握することにあつたわけではない。まずは的確に把握した上で、それを「ばかげた理論」として位置付けること。これが、ステュアートの計算貨幣論に対するマルクスの間合いであったことが想起されねばならない。

12) 計算貨幣論が論じられる箇所、ステュアートは、その主な「事情」を4つにまとめている。

「第1に、価値を計るべき諸物の豊富さ。／第2に、諸物にたいして人間がもつ需要。／第3に、需要者間の競争、そして／第4に、需要者の能力の程度。」(Steuart [1767] p. 215, 訳6頁。文中の「／」は改行を意味する)

3.2 計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評

『経済学批判』第二章「B 貨幣の度量単位にかんする諸理論」では、ステュアートの計算貨幣論が抄録されたあとに、まず以下の論評が行なわれている。

ステュアートは、流通で価格の度量標準としてまた計算貨幣として現われる貨幣の現象だけにかかずらっている。もし種々の商品がそれぞれ一五シリング、二〇シリング、三六シリングというように価格表に記入されているならば、それらの価値の大きさの比較のためには、銀の実質もシリングという名称も、實際上私にはどうでもよいのである。一五、二〇、三六という数的比率がいまやすべてを語っており、一という数字が唯一の度量単位となっている。比率の純粹に抽象的な表現は、一般にただ抽象的な数的比率そのものであるにすぎない。だから首尾一貫するためには、ステュアートは、たんに金銀だけでなく、それらの法律上の洗札名をも放棄すべきであった。(Marx [1859] S. 63, 訳100頁。文中の傍点強調は原文による)

第一文は、ステュアートの計算貨幣論の総括に相当するものと思われるが、ここではまず、第二文以降の実際の論評を見ていくことから始めたい。

諸商品の価格が、「一五シリング、二〇シリング、三六シリング」というかたちで所与のものであれば、15:20:36という「抽象的な数的比率」がすでに判明しているのだから、この場合には「銀の実質もシリングという名称も」「どうでもよい」のだとされている。そしてこのときの「度量単位」として「一という数字」が挙げられ、ステュアートへの論評が行なわれている。すなわち、ステュアートが「首尾一貫するためには」、自らの「計算貨幣」概念から金銀だけではなく、「貨幣単位」をも放逐すべきだったのだと。

確かに、先に見たところによれば、ステュアートにおいても事物の〈測定〉は、突き詰めれば、「抽象的な数的比率そのもの」で示すことができるだろうと考えられる。ただし、その際に大切なことは、それぞれの属性を測定する基準の「一という数字」が、それぞれどれだけの大きさを有するのかという点にあった。ステュアートにおいてそれは、「しきたり」によって定められるということが論じられてもいた。

たとえば角度を測定する場合に肝心なことは、「しきたり」によって円周の1/360を「一という数字」に対応させることなのであって、それを「1度」と呼ぶか、それとも「1グラム」と呼ぶかは「どうでもよい」といえなくもないのである。さらに推し進めて、「度」なり「グラム」といった単位を仮に用いないとしても、「一という数字」に「標準的な大きさ」が対応していればことが足りるのだから、実践上の便益という問題は残るだろうが、「単位」を放逐して「数的比率」のみで測定を行なうことはできるだろうとも考えられる。またステュアートにおいては、一般的な〈測定〉という観点から「計算貨幣」が考察されていたことに鑑みて、「首尾一貫するため」なのかどうかは別にして、「法律上の洗札名をも放棄すべきであった」といえないこともない。このため、この部分のマルクスの論評には、一定の妥当性が認められてよい。マルクスの論評は次のように続く。

彼は、価値の尺度の価格の度量標準への転化を理解していないので、当然に、度量単位として役だつ一定量の金は、尺度として他の金量に関係しているのではなく、価値そのものに関係していると信じる。(Marx [1859] S. 63, 訳100頁)

ステュアートにおいては、金の価値が変動してしまうということから、1 gの金の価値=1ポンドといった規定は設定しえず、「観念的なモノサシ」としての〔1ポンド〕が提示されるに至ったと考えられた。しかしここでは、1 gの金の名称=1ポンドという考え方が対置されている。そしてこの見解に到達するためには、「価値の尺度の価格の度量標準への転化」が理解されなければならないのだという。

ここでいわれる「価値の尺度」というのは、根源的には、商品の価値が他商品の使用価値によって表現されることとして押さえることができるだろう。そしてたとえば、金が一般的等価物になる、つまり貨幣という形態規定を受け取ることによって金は、「種々雑多な商品の価値を価格に、すなわち想像された金量に転化させる」(Marx [1867] S. 113, 訳177頁) 素材として役立つ。ここでいわれる「価値の尺度」という意味は、このように解せる。

そこでさらに検討されるべきは、そうした「価値の尺度」が、「価格の度量標準」に転化するという意味になる。この問題は、「いろいろな金量として、諸商品の価値は互いに比較され、計られるのであって、技術上、それらの度量単位としてのある固定された金量に関係させる必要が大きくなっていく」(Marx [1867] S. 112, 訳176-7頁) という、実践上の便益の問題として捉えられよう。たとえば、一般的等価物としての形態規定を受け取っている金の1 gを〔1ポンド〕と呼び、それが「さらにいくつもの可除部分に分割されることによって、度量標準に発展する」(Marx [1867] S. 112, 訳177頁)。つまり、〔1ポンド〕の分割部分にそれぞれの名称を充てておくことが便益上必要になっていくということであり、「価値の尺度の価格の度量標準への転化」という意味は、このように解することができる。言い換えれば、マルクスにとって「価格の度量標準」とは、一般的等価物の基準単位名から生ずる派生問題に過ぎないのである。その意味からすれば「価格の度量標準」は、理論的には説く必要がないものとして捉えられていると見ることもできる。つまりマルクスは、ステュアートに対して、「貨幣単位」とは何かという問題、諸商品の価格がなぜ「それぞれ一五シリング、二〇シリング、三六シリングというように」示されるのかを考える必要があるのではないかと問うているわけである。そしてここまでの限りであれば、ステュアートの計算貨幣論に対するマルクスの論評は、一つのありうる問題提起であろうと思われる。

3.3 価値概念の観念性について

上記引用文の後には、以下に見る言説が続けられるが、そこでのステュアート評には微妙な点が残される。しかしそのことがあって、マルクスの考え方とステュアートの考え方との差異を浮き彫りにしているとも考えられる。

諸商品はそれらの交換価値の価格への転化によって、同名の大きさとして現われることから、彼は、それらの商品を同名のものにする尺度の質を否定する。(Marx [1859] S. 63, 訳100頁)

マルクスにおいては、諸商品の「交換価値の価格への転化」、つまり〈20エレのリンネル＝1ポンド（＝たとえば1gの金）〉という価格形態の根底に、たとえば〈20エレのリンネル＝1着の上着〉という交換価値（価値形態）が想定される。しかしステュアートにおいては、諸商品が「同名」の「ポンド」を用いて比較されるのはなぜなのか、という考察が抜け落ちていとみなされたことから、「彼は、……尺度の質を否定する」と論評されているのではないかと推察される。つまりここでは要するに、「いろいろなものの大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうようになるという」(Marx [1867] S. 64, 訳96頁) ことを、ステュアートは見落としているのではないか、という論点が念頭に置かれているものと思われる¹³⁾。

すなわち、「ステュアートは、流通で価格の度量標準としてまた計算貨幣として現われる貨幣の現象だけにかかずらっている」ことによって、「あたかも貨幣が諸商品を通約可能なものとする」(Marx [1859] S. 52, 訳81頁) と考えてしまったのではないかという問題である。確かに、諸商品の価格形態は、〈20エレのリンネル＝1ポンド（＝たとえば1gの金）〉というかたちで示され、「諸商品は、貨幣によって通約可能になる」(Marx [1867] S. 109, 訳171頁) ように見えるかもしれない。しかしマルクスにとっては、実はそうではない。冒頭商品論の一つの課題は、この点を解明することにあつた。

すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自な一商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自な一商品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。(Marx [1867] S. 109, 訳171頁)

つまり、諸商品には「対象化された人間労働」というかたちで「価値」が内在しているのであり、そうであるがゆえに、諸商品は「自分自身の完成した価値姿態」(Marx [1867] S. 107, 訳169頁)、つまり価格形態をもたざるをえない。「彼は……尺度の質を否定する」というマルクスのステュアート評は、自らの価値論に立脚することで行なえたといえよう。また、マルクスの価値概念に

13) その意味からいえば、計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評は、アリストテレスに対する「価値概念がなかった」(Marx [1867] S. 74, 訳114頁) という評価と同様の観点から行なわれたものであったと見ることができる。マルクスによれば、アリストテレスは「5台の寝台＝1軒の家」と「5台の寝台＝これこれの額の貨幣」というのは同じことであると見抜いている。「ところが、ここでにわかに彼は立ちどまって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう。「しかしこのように種類の違う諸物が通約可能だということ」すなわち、質的に等しいということは、「ほんとうは不可能なのだ」と」(Marx [1867] S. 74, 訳113頁)。その原因は、アリストテレスが生きた奴隷労働に基礎を置くギリシア社会の特殊歴史性に求められている。マルクスのアリストテレス評にも興味深い論点が提示されており、別途検討を要する。ただ本文でも考察することになるが、ステュアートの計算貨幣論は、「尺度の質を否定する」という帰結には必ずしも繋がらないだろうと考えられる。

基づくならば、諸商品の〈価値〉が変動してしまうがゆえに「計算貨幣」は「いかなる物体にも固着させることができない」としたステュアートの計算貨幣論は、承知しがたいものに映ずるはずである。

もちろん、商品に内在する価値量が不変であるとマルクスも考えていたわけではない。たとえば、当該商品の生産方法に変化が生ずることによって、その商品の価値量は変化しうる。しかしマルクスにとって、そのこと自体は問題にならない。なぜならば、「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない」(Marx [1867] S. 54, 訳79頁)と捉えられることによって、諸商品の価値量は、時間を「モノサシ」にして測定されるであろうからである。このため、たとえば金の「価値」が変動するということは、基準となる時間そのものの伸縮としてではなく、一分、二分、あるいは一時間、二時間といった、積算量の変化として捉えられることになる。長さの測定と類比してみるならば、金の価値の変動とは、基準となる長さ、つまり巻尺に刻まれた一目盛分の長さが増減することなのではない。そうではなくて、これまで2メートルの巻尺を用いて測定されていた諸物の長さが、1.5メートルの巻尺で測定されるようになる事態に似ているのである。このためマルクスにとっては、たとえ商品価値の変動という論点が突き付けられたとしても、そのことは、ステュアートの計算貨幣論に与する理由にはならないのである。

こうした考え方に基づくならば、ステュアートの計算貨幣論は「ばかげた理論」に見えてくるのかもしれない。しかし、果たしてステュアートの計算貨幣論は、マルクスがいうように「尺度の質を否定する」ものなのだろうか。ステュアートの議論においても、そもそも諸商品の側に測定される〈価値〉が存在しなければ、つまり測定される「質」が存在しなければ、「計算貨幣」を用いてその量を測定することはできない。このため、ステュアートが「尺度の質を否定」していたとは必ずしもいえないのである。もちろん、だからステュアートの計算貨幣論の方が正しいということにも直ちにはならない。ここまでの検討を通していえることは、計算貨幣論におけるマルクスのステュアート評には首肯し難い部分が残される、ということまでである。しかしそうであるとすれば、「尺度の質」の規定を、本稿に見たマルクスとは異なった観点から行ないうるか否かという問題は、検討に値するものとなってこよう。

マルクスは、「貨幣の現象だけ」に囚われてしまうならば、「尺度の質を否定する」ことに繋がってしまうだろうと考えた。しかし、ステュアートの計算貨幣論は、以下の観点を突き詰めることを通して到達された概念と見ることもできるのである。そしてそれは、「尺度の質の否定」には必ずしも繋がらないものと思われる。

「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知っていないなくても、よく知っていることである。」(Marx [1867] S.62, 訳93頁)

商品には、米10kg=1500円、上着1着=3000円といった価格が付されていることは、「だれでも、ほかのことは何も知っていなくても、よく知っている」。商品は価格形態をもつことによって、互いに異なった使用価値を有する諸商品との量的比較が可能になる。それは一見すると、貨幣が諸商品を通約可能にしているようにも思える。しかし考えてみると、商品の価格形態とは、諸商品に備わる〈何か〉が貨幣でもって測られていると見ることもできよう。つまり、「貨幣の現象だけにかかずらっている」かに見える領域からでも、諸商品には、貨幣によって測られる共通の「尺度の質」が備わっているという問題には接近しうらうと考えられるのである¹⁴⁾。

仮に、その何かのことを〈価値〉と呼んでみることにすれば、貨幣とは、商品に備わる〈価値〉を測る「モノサシ」として捉えられることになるはずである。ステュアート、そしてマルクスには、貨幣単位が一定量の商品と関連付けられている現象が観察された。この現象に対してステュアートは、事物の属性を測定する「モノサシ」がどのようなものでなければならないかという観点から接近して、「モノサシ」の不変性に到達したのである。しかるに商品の価値は変動してしまふ。とすれば、その不変性が要請される「モノサシ」として、商品は不適格ということにならざるをえまい。つまり、商品価値を測定する際に基準となる〈価値〉は、実在的には提示できない。しかし、測定という観点からすれば、基準の価値は観念的には存在せざるをえないはずである。ステュアートにおいては、この基準の価値が「計算貨幣」と呼ばれたのである。

結びにかえて

このように解釈してくると、諸商品に備わる「尺度の質」を捕捉しつつ、それを測定する「モノサシ」として、ステュアートの「計算貨幣」は理解できることになる。それは、マルクスが考えた「尺度の質」とはズレを生じさせることになるかもしれないが、「尺度の質」へと接近しうらうもう一つのあり方ではないかと考えられる。価値から「貨幣の現象」へと接近していったマルクスとは逆に、「貨幣の現象」から出発する方法によっても、「尺度の質」という問題には到達しうらうであろうという見方になる。このことは単に、マルクスが取り組んだ問題を逆方向からでも読み解きうらうというだけには留まらず、さらなる展開へと繋がる可能性を伏在させているものと考えられる。

すなわち、不換銀行券に象徴される現代の貨幣現象から振り返ってみると、マルクスの貨幣観には一定の偏りがあることを認めざるをえない。それは、基底に据えられた価値概念からの影響を強く受けたものになっていると思われる。マルクス価値論の一面として認められる、いわゆる投下労働価値説に基づいて商品の価値規定が行なわれたことは、そのあとに続く価値形態論の対象を、労働生産物商品に強く絞込む効果をもたらしたと考えられるのである。このことは、労

14) この点について、宇野弘蔵は次のような興味深い観点を提示している。

「商品は、種々異なったものとして、それぞれ特定の使用目的に役立つ使用価値としてありながら、すべて一様に金何円という価格を有していることから明らかなように、その物的性質と関係なく、質的に一様で単に量的に異なるにすぎないという一面を有している。商品の価値とは、使用価値の異質性に対して、かかる同質性をいうのである。」(宇野 [1964] 21頁)

働生産物商品の中で最も適格な物的属性を備える貴金属が、貨幣の地位に就くという貨幣観を生じさせる契機をなしたと思われる。もちろん、マルクスによって観察された「貨幣の現象」からすれば、そこには一定の妥当性があったとってよいのだろう。金こそが本位貨幣として、幣制の根底に位置していたであろうからである。

ただ、ひとたび視野を現代の貨幣現象にまで広げてみると、なるほど、マルクスの時代でも現代でも、商品に価格が付されているという点については何ら変わるところはない。にもかかわらず、現代の貨幣現象をマルクスの金貨幣論で読み解こうとすれば、貨幣とは何なのか、「貨幣の謎」を解明する価値形態論で論じられていたことの意味は何であったのかという点が、改めて問われざるをえないこともまた事実である。もちろん、本来の貨幣を金貨幣と押さえて、本来的貨幣からの偏差として現代の貨幣現象を捉える行き方はいくらでもありえよう。また、観察される現象がどうであれ、その背後には金貨幣が透けて見えるという議論を組み立てることはできるのかもしれない。

しかし、もう一つのありうる展開と思われるのは、ステュアートの「計算貨幣」にある意味で近い現代の貨幣現象を受けて、マルクスの金貨幣論を改めて捉え返すことである。もし、商品価値が、〈観念的価値〉として「尺度の質」を有するものであるならば、検討されるべきは、商品価値の質をなすものとして提示された抽象的人間労働の意味であり、価値量を規定するものとして提示された、当該商品を生産するのに「社会的に必要な労働時間」の意味ということになってくるはずである。そしてさらには、そうした商品に内在する価値の表現様式、「価値は、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現されえないのである」(Marx [1867] S. 63, 訳95頁)という考え方の、「でしか」の当否の検討に及ぶものと考えられるのである。

これら諸点を引き続きの研究課題として掲げて、本稿のひとまずの締め括りとする。

【参考文献】

- 有江大介 [1980] 「マルクスにおける「抽象的人間労働」の概念」『経済学研究』第23号、東京大学経済学研究会
- 伊藤誠 [2009] 『サブプライムから世界恐慌へ』青土社
- 宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』岩波全書
- 奥山忠信 [1990] 『貨幣理論の形成と展開』社会評論社
- 基礎経済科学研究所編 [2008] 『時代はまるで資本論』昭和堂
- 松尾匡 [2009] 『対話でわかる 痛快明解 経済学史』日経BP社
- 向井公敏 [1992] 「ルービン以後のマルクス—マルクス価値論のプロブレマティーク(2)—」『同志社商学』第44巻第3号、同志社大学商学会
- 向井公敏 [1990] 「抽象的人間労働の存在論—マルクス価値論のプロブレマティーク(1)—」『同志社商学』第42巻第2号、同志社大学商学会
- Marx, Karl [1867] *Das Kapital. Band I*, in *Marx-Engels Werke*, Band 23, Dietz Verlag, 1962 (岡崎次郎訳)

『資本論』国民文庫 第一分冊, 1972年)

Marx, Karl [1859] *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*. in *Marx-Engels Werke*, Band 13, Dietz Verlag, 1961 (杉本俊朗 訳『経済学批判』国民文庫, 1966年)

Steuart, James [1767] *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*. Edited by Andrew S. Skinner, with Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta. *Sir James Steuart's Principles of Political Economy*. Vol. 2-3, Pickering & Chatto Ltd, 1998 (小林昇 監訳／竹本洋 他訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』名古屋大学出版会, 1993年)